

大リーガーを超えた男

いうまでもなく、**イチローと大谷翔平**である。

イチローは、1年目のオープン戦の時、ある投手が投げたボールをファールチップした。その投手が、驚いて駆け寄り、「あの球にあてたのか？ 信じられない」とまでいった。外角に流れるスクリーンボールの一種なのだが、今まで誰もあてることができず、かすりもしなかった。イチローの動態視力とバットコントロールに驚嘆したのである。・・・この伝でいくと、伝説になっているベーブ・ルースやテッド・ウィリアムズ（現時点では最後の4割バッター）のように、1分間に78回転するレコードの文字を読めたかもしれない。

1年目に新人王とMVPを獲得。4年目には、余程の大リーグ通しか知らなかったシスラーのシーズン最多安打257本を抜き、262本を打ち、シスラーの娘さんやお孫さんとグラウンドから対面した。さらに10年連続シーズン200安打もMLB新記録だった。3000本安打。日米通算4357本。そして引退後2年でマリナーズの球団殿堂に選ばれた。

ヒットの80%はシングルヒット（単打）である。ホームランが少ないのだが、フリーバッティングでは、外野席にポンポン打ちこんでいたというから、もしホームラン狙いだったら、20本や30本は打っていたに違いない、とは同僚の選手の話。ホームランダービーに出場させていたら、どうなっていたらろう。

この間、ピート・ローズのやっかみ混じりのイチャモンが激しかったが、MLBの通算最多安打記録は、ローズがもっている。だから、イチローのヒットは内野安打が多いのだ、日本での記録は認められない、などなどである。ピート・ローズは、監督をしながら八百長に関与し、永久に野球殿堂入りが叶わない選手である。「日米通算」などというのは、日本のマスコミだけである。日本の投手は大リーガーの域まで達していない。だから、この点ではローズの言う方が正しいと思う。Ichi Meterをマリナーズファンの女性が考案し、一躍時の人になったりした。イチローは、大リーガーとして3000本安打をなしとげてから引退した。

イチローがなぜホームランを狙わず、打率や安打数にこだわったのか、その理由については、われわれにはわからないし、あるいはイチロー本人にもわからないのではないか。・・・3人目の大リーガーである長谷川滋利投手によれば、「自分がヒットにできる球がくるまで、すべてファールにして、好球が来るまで待つ、を公言し、かつ実行したのはイチローだけだ」という。これなら、投手としては、何球も工夫して投げさせられ、挙句にシングルヒットや四球になるなら、さっさとシングルヒットを打たれる方が楽だ、と考える。だから、あれだけのヒットを量産できた、とも考えられるという。

のちに移籍したりしているが、超一流と呼べる選手は、一選手の選手寿命を仮

に 20 年として考えると、その世代に 1~2 人、多くても 3~4 人だろう。それほど多くない。だからイチローは、野球が始まってから最高の、100 年にひとりの天才である。さらに次の 100 年に、イチローのような選手が現れるのだろうか。ミスター・ヤンキースともいえるジータが、「イチローの記録は、イチローにしか破れない」と語った。それほど Outstanding な記録である。

イチローの引退と 2 年間だぶるように、大谷翔平が大リーグ入りを果たした。1 年目はホームラン 22 本、投手として 4 勝。この年新人王に輝いたが、この時点では、打撃部門では、大谷よりも成績の良かった選手がいた。「投手」があったから、新人王になれたといってもいい。しかし、この時点では、投手としても全米でそれほど話題になったわけでもない。むしろ、翌年など投手としては、失格の烙印を押されかねなかった。なぜなら、2 年目に肘の手術、3 年目には膝の手術をし、コロナと相俟ってほとんど活躍していない。そして 4 年目を迎える。このまま投手兼野手 (DH) を続けられるかどうか、決断を迫られていた。球団は、はっきりとは言わないが、言外に匂わせていたらしい。

この間は仕方がないので、レジー・ジャクソン (すでに引退している) や、ポホルス (途中で移籍した 600 本以上のホームランを打っている現役かつ伝説の選手) やトラウト、レンドーンなど、同じチームの MLB の歴史に残る選手たちに教わったりしているだけで、あとはリハビリテーションの毎日であった。

4 年目。この年、オープン戦で、どこの球場だったか忘れたが、センターのバックスクリーンをはるかに超える大ホームランを飛ばし、見ていた監督や MVP に三度輝いたトラウトやレンドーンらが唾然としたほどの大飛球を放った。公式には 470Ft (フィート) (約 143 メートル) だが、記録係が測定ミスをしたのだ、少なくとも 600Ft は飛んでいたはずだ、とトラウトらが言う。……飛距離の測定は、打球の速度、角度、その日の風向きと強さ、気温、ボールの反発係数などなど、いろんな要素をコンピューターにデータを入力して解析させるらしいが、場外ホームランなら、一度そのデータが精確なものかどうか、実測して確かめりゃいいじゃないか。航空写真を撮影すればわかる。600Ft といえば Babe Ruth の 175 メートルや大リーグ記録の 181 メートルを抜く……今年の活躍を確かにするようなものだが、それはあとからみれば、の話である。つまりは、Monday morning quarterback である。

シーズンが始まってから、大谷の快進撃はとどまるところなく、監督の印象に残っているのが、4 月のチーム 4 試合目のできごとである。時速 100mile 以上の投球を連発し、打っては、左中間に大ホームランをかつ飛ばした。今みんなが言う「リアル二刀流」である。5 月 6 月になってようやく本物ではないか、とみんなが考え始めた。それ以降の活躍は知らない人はほとんどいないのではない

か。・・・・・・・・しかし、そんな超人的な **Two Way Player** がいるはずがない。かならず、夏場か後半戦になってから速球のスピードが落ち、スプリットの切れも悪くなる、と敵チームはみな希望的観測ながら、信じていた。ところが、いつまで待っても大谷のスタミナは衰えることなく、ときには前半を凌ぐ速球やスプリットを投げ込む。こいつは、とんでもない奴が現れたと分かった時には、すでに **SHO-TIME** として定着してしまっていた。(投手は **Show-Time** だったものが、名前の **Shouhei** とを合わせて作った造語である。子供たちは、これをみるために、球場に駆けつける。

「二刀流」は、日本人なら勘違いする人はいないが、アメリカ人の中には、野球に興味がない人なら **Bisexual** と勘違いする人もありそうな話である。だから **Two Way Player** と表現するらしい。

また、東海岸（ニューヨークやボストン、あるいはシカゴもそうかもしれないが）では、「なにか西の方で派手に花火を上げている奴がいるそうじゃないか」と鼻であしらうのが通常らしい。(イチローのときもそうだった。) ところが、大谷がニューヨークに行ったとき、ヤンキース相手にいきなり名刺代わりの 2 連発。度肝を抜いた。投手の方でも勝利投手になる。その後連勝したり、三振奪取も計算どおりの、監督にとっては有難い選手になった。去年から監督が代わったことも結果的にいい方向に進んだのかもしれない。ヤンキースのファンが、悔し紛れに「ホームラン王も打点王もサイ・ヤング賞もみんな大谷のものだ！」と吐き捨てるように言ったことがボクの印象に残っている。

白眉はオールスター戦である。MLB 機構は、オールスター戦のルールを変更してまで、大谷の打席を増やそうとした。先発投手もそうで、最もいい投手を先発に使うのだが、大谷の **Two Way Player** を誇示するかのようになり、先発投手兼 **DH** で出場させた。ほとんどの選手が大谷と握手したり、ハグしたり、一緒に写真を撮りたがった。米国では 1 試合だけだから、他の選手の活躍も捨てては置けない。大谷は期待に応えて、時速 100Mile (160.9 km) を出し、のちにこのボールが 25 万円で売れた。勝負を決めたホームランを打った選手のボールが 9 万円。さらに、この時の大谷のユニフォームは当時の為替レートで 1440 万円。圧倒的な数字で、当分出てこないだろう。この頃までには、**Two Way Player** の基準を **MLB** 機構が決定した。なにせ、前例のないことだから、すべて大谷を基準にしなければならない。・・・・・・・・この頃には大リーグファンで大谷を知らない者がいない状態で、いわゆる **SHO-TIME** (誰がいいだしたか、**Show** と **Shouhei** と、このために名前をつけたかのようなうまい表現だと思う。) がブームになり、子供や女性のファンが急増し、観客動員数も飛躍的に増加した。・・・・・・・・他チームの選手たちや首脳陣は、夏場にきっと「疲労」でつぶれる、と考えていたが、すこしも変わらない。

後半は、ホームランが減ったのだが、相手も大リーガーとしてのプライドがある。たとえば、専門家が3人で鼎談していたが、「この3試合で投げられたボールを分析すると、21球のうち、どのボールを打ってもホームランにはならない。」図とともに解析しているのだが、ボクはこの話を聞いたとき、大リーガーの投手のレベルは、とても日本の投手では、歯が立たないと思った。佐々木、上原、松坂、など、日本では一流でも大リーグでは、せいぜい一流から二流の上くらいと考えていいだろう野茂。田中や黒田が一流と認められた。これらの投手陣では、とてもものに MLB の歴史に残る投手にはなれないだろうと思っている。もっとひどいのもいるが、名誉のために名は伏せる。すなわち、どの選手も「超一流」とは認められなかった。

エンジェルスも、当初大谷グッズは5~6種類だったものが、いまでは40種類を超えるようになり、漢字の大谷翔平のユニフォームなど、飾る前に売り切れる状態だったという。

では、なぜイチローのときには、今回の大谷のような全米を巻き込む大フィーバーにならなかったのだろうか？

答えは簡単。**アメリカの野球ファンは、ホームランが好きなのだ！**

これにくわえて、**大谷の人間性**がある。コロナによる閉塞感もあっただろうし、子どもが両親に「球場に連れてって」という歌やコマーシャルが流されてはいたが、大谷ひとりの観客動員数をみれば、CMはもういらぬ。MLBの至宝として他のチームが大切にしてくれるだけでいい、MLB機構はそう考えている。わざとデッドボールを当てるような行為は許さない。現に、大谷は、ホームラン王にも打点王にもなれなかったが、選手間投票の MVP (Players of the year) に推された。つまりは、両リーグにまたがっての MVP である。アメリカンリーグの MVP にも満票で選ばれた。これだけでも、10年に1人あるかどうか。

そしてもっとも価値のあるとボクが思うのは、「MLB機構の特別表彰」である。MLBが大谷にどれほど感謝・感激しているかがわかる。その時のインタビューで、「ボクでいいのか」と語ったように、じつに謙虚である。これは、普段のインタビューでもそうで、3試合で四球や申告敬遠が11個にのぼったとき、「試合の流れでそうなることはあるし、ボクもそうする可能性はある」となんとも優等生の応答である。

可愛らしい顔をして、ときにウィンクしたり的茶目っぷりも、謙虚な態度をとる姿勢はアメリカ人にもわかるのだろう。

普段のインタビューを聞いていると、10代で四冠王になった藤井聡太棋士のインタビューを思い出す。彼も決して驕ることなく、常にまだまだ研究しなければならないことがいくらでもあります。未熟だと応答をする。

大谷の人気の秘密のひとつに、天から授かった、あるいは野球の神様がくれた投手兼打者としての才能、そのホームランの飛距離、打球の速さ、技術、投手として時速 100Mile を超える球速だけではない。制球力もよくなり、スプリットにいたれば 10 球投げて 1 回当たれば僥倖に恵まれたと考えるほど、切れがいい。この 1 年、年間を通して出場できたことは、大谷にも思いがけないことだったかもしれない・・・そうでなければ、野球のない国にも、その名前が轟くはずがない。

同僚のレンドーンは一流の選手であるが、練習中、大谷がホームランをあまりにも簡単に打つので、フリーバッティングのあと、声をかけてバットの先から芯にいたるまで念入りに調べていたが、何もない普通のバットであるらしいことに首を傾げていた、などなど、逸話が多い。

むしろ、高校 1 年生の時に書いたという、「野球がうまくなり、大リーグで活躍することができるように・・・」と自らを律するための表にある。いわく「体づくり」「人間性」「メンタル」「コントロール」「キレ」「スピード 160 km」「変化球」そして「運」。さらには、その「運」を味方につけるための普段の努力。これは、マンダラチャートというビジネスマンのために考え出されたものだが、大谷の高校野球の監督が「目標設定チャート」に利用したもので、米国でも大谷マンダラとして話題になったものである。ただ、その目標が高かっただけのこと。また、一時しのぎでもなかったこと、に意味がある。現在でも継続している。

だから、この「運」というのは、子どもの発想ではない。選手生活の晩年になってきた選手の感慨のようなもので、我々も「運」に恵まれたなどと思うに至るのは中年以降のことである。

今でも、グラウンドに入るときには一礼し、打席に入るときには審判と相手キャッチャーに会釈を欠かさない。

審判さんに対する態度、ゴミを拾う、挨拶をするなどなど、ごく当たり前のことなのだが、継続して自ら律することの困難さを我々も振り返って考えてみる必要があるのではないか。さらに相手を思いやる心に溢れている。見事、ホームランを打たれた相手を三振に打ち取った時、珍しくガッツポーズをみせたが、それでも相手の選手に失礼のない程度に抑えている。サッカーの選手ほどはしゃぎたてない。ホームランが出ずに苦しんでいた時でさえ、子どもたちがサインをねだると、荷物を降ろしてサインに応じる。・・・むしろ、こういう「人間性・人格」のゆえに人気がある可能性が高い。

1 年目、バットをねだる子供に、バットをプレゼントしたり、初ホームランボールを持っていた少年に、サイン入りのバットとボールと渡してボールと交換してもらったり。

そういう普段の努力があつての今の大谷の人間性・人格なのである。

アメリカ人は、単なる不親切なバカなのか、といえばそうでもない。たとえば、長蛇の列を作っているときに杖をついている人がきたら、「前の方に行け **Go ahead!**」とみんなが口を揃える。車いすの人がきたら優先的に前の方に行くことに文句を言わない。ちょっとした段差のところでは、見ず知らずのおばあさんにもさりげなく手を差し伸べる。これは、子どもの頃からの習慣である。だから、躰は大事だという。**Good luck!**といわれたら、条件反射的に**Thank you!**というようなものである。これは、われわれ日本人がぜひ見習わなければならない、ほとんど唯一とっていい習慣である。

大谷の魅力は、その人格・人間性にある。たとえば自分がへし折ったバットの先を5~6メートル歩いて拾って相手の選手に渡したり、さり気なくゴミを拾ってポケットに入れたり、ダッグアウトのゴミを拾うのは、全米で知らない者はいない。落ちているゴミは、他人が落とした運だ、という。折れたバットを拾いに行き、相手選手に肩を抱きながらさめるようにしたときには、「オーッ、サムライ！」さり気なくゴミを拾ってポケットに入れる。球場で先輩に遭えば、飛んで行って挨拶をする。何というほどのことでもないが、子供にせがまれて球場に来た父親や母親は、それをみて震えるほどの感動を覚え、子どもの躰にすぐに利用する。きわめて自然なことだと思う。……オレでもそうするだろう。

球場に来ているファンにもサービスを忘れない。仮に相手チームのファンであっても関係なく、外野の芝生に落ちたサングラスを投げ上げてやる。申告敬遠が度重なれば、相手ファンから自チームの監督へのブーイングが沸き起こる。その黒人監督は大谷ファンなのだが、試合に勝ってポストシーズンへの参加資格がとれるかどうかの瀬戸際だからやむを得ない。その辺りの阿吽の呼吸を読めるのが大谷のいいところなのである。「大谷カメラ」で大谷の一挙手一投足を映像に遺す。

球場に現れるとスタンディングオベーションで迎えられる。

イチローや他の日本人選手や先輩に球場で会うと、駆け寄って挨拶することを欠かさない。ほんのちょっとした心遣いなのだが、できない人が多いことでもある。……結局敵を作らないことに繋がっていく。それもわざとらしく見えない。

あるとき、大谷の足元に2球続けて投げ、デッドボールになった。アンパイヤーは、即座に三塁の審判を呼び、二言三言。即退場である。僕が見ていた限りではわざと投げたようには見えなかったのだが。また、ボクは見ていなかったが、4球つづけて足元に投げ、デッドボールになったとき、監督と投手は即刻退場である。大谷は、たとえば、一塁手と楽し気に話をしている。審判さんへの敬意が、直ちに跳ね返ってくる。そういうことを狙ってしているわけではないところに大谷の人气が急上昇する所以でもある。9回2死でデッドボールを狙ったときには、監督も投手も即刻退場である。……これは、日本でもそうだろう。

デッドボールをあてると、謝罪する心を現す。・・・そんな選手は、大リーグにはいない。日本でもまれである。

申告敬遠が繰り返されたとき、オリオールズのファンまでもがブーイングをするし、一塁手が気の毒がって、なにやら話しかけた。ボクは、「申し訳ないです」「仕方がないです」という風な会話と思ったのだが、この一塁手は、ホームラン 33 本で新人王に輝いた選手で、「思い切って話かけたんです、ボクはあなたのプレーが大好きです」。すると、大谷選手が「ボクもあなたのプレーが大好きです。」(多分、Me too! と言ったと思うのだが。) その一塁手は顔が火照っているかのような感じで、赤くなっていたが、嬉しそうだった。・・・これでは、相手も尊敬するしかなくなるだろう。このあたりが大谷の真骨頂であり、人間性なのだろうと思う。この一塁手のみならず、誰もが大谷のファンになるのは当然とも言える。

10 年前の三冠王・MVP のカブレラも大谷のファンで、直前に投手大谷からデッドボールを受けていた。大谷が四球で出塁すると、ファーストミットでパンチを繰り返す真似をし、別の時には股間にさわろうとしたり、後ろポケットから手袋を抜いてみたり、いろいろチョッカイをだす。大谷も苦笑いをするしかないが、カブレラは大谷のファンなのである。当然のことながら、黒人差別のようなバカなこともしない。(日本に差別がないとは言えないが)

解説者で、アジア人を貶めるような表現をした男は、無期限の謹慎処分を受け、シーズン後によく許された。インタビューを日本語で受けるのだが、「英語を話さない選手なんか大リーグの顔にはならない」と言った男も初めにはいた。この時も、「差別だ!」との抗議に謝罪せざるを得なくなった。イチローと同様、間違っただけで解釈されることを嫌っての話なのであるが。

大谷のもたらした経済効果は、低く見積もっても 250 億円を超えるという。最近でいえば、年俸 22 億円の田中投手の時、数十億円といわれていたから、桁違いのスケールである。なによりも、ファンの目を四大スポーツ(後述)の他の 3 つよりも野球にも振り向かせた功績は、経済効果よりもはるかに大きい。日本でもカレンダーや記念切手が発売される。もっと大きくなるかもしれない。

大谷の才能のひとつに「野球 IQ の高さ」がある。修正が早いことである。(よくわかるように言えば、野球 IQ の低いのが阪神タイガースである。新庄なんか、その典型である。よくわかるでしょ! 余裕があれば後述しますが)

アメリカ在住の長女は、まったく野球などに興味を示さない子だが、周囲の日本人でさえ、大谷翔平を驥に利用しているという。ましてやアメリカ人はさらに徹底しているらしい。

大谷は、リトルリーグの野球大好き少年が、身体が大きくなって外国人にひけ

をとらなくなつて、そのまま大リーガーになつたような男なのである。

とつておきの話の類になるが、大谷専属の水原一平氏が、最優秀通訳賞をもらった。通訳の何を基準にして判断したのかよくわからない話だが、いかにもアメリカ人らしい発想だと可笑しかった。……徳は孤ならず、必ず隣ありという。

アメリカには四大スポーツがある。MLB、NBA、NHLそしてNFL（順に野球、バスケットボール、アイスホッケーリーグ、アメリカンフットボール）である。そして、これらのスポーツの一流選手たちが、「大谷は素晴らしいアスリート athlete だ」と口をそろえて言うのである。NBAもNHLも室内競技だから観衆は、せいぜい1万人規模である。フットボールに至っては、ヘルメットをかぶつて play する。10万人が見守るスーパーボール Super bowl のチケットはプラチナチケットで、指名手配犯の検挙に役立てている。これらとくらべると、MLBは、ヘルメットはかぶるけれども、素顔で一挙に数万人を収容できる。

大谷はよくベーブ・ルース Babe Ruth に比べられる。本人は「光栄なことです」と言う。しかし、時代背景を考えると、単純に Babe Ruth の記録と比較するのはいかななものか。Babe Ruth の活躍した時代は、禁酒法の時代と重なっている。つまり1910年代から1920年代にかけては、ギャングが暗躍どころか白昼に銃撃戦がおこなわれる時代で、マシンガンやダイナマイト、ライフルなど、発砲音がシカゴなどでは日常茶飯事だった時代である。アル・カポネやエリオット・ネスが活躍した時代で、現在は Untouchable で有名になっている。当然ながら、賭博も日常のことで、MLBも八百長に染まり、急速に客足が遠のいた時代である。場合によれば、MLBが消滅していたかも知れない時代で、その客足を再び球場にもどしたのが、少年時代は喧嘩に明け暮れていた Babe Ruth のホームランである。……現在とルールが異なっているが、当時、ホームランは、別格に扱われていたらしい。一選手のシーズンホームランというのは、せいぜい5~6本程度で、そこに Babe Ruth が登場し、11本からはじまり、29本、さらに59本、そしてずっと MLB 記録に遺されていた60本に到達する。このとき、47本の Lou Gehrig が2位だったくらいで、その他のシーズンでは2位はせいぜい10本程度の、ぶっちぎりのホームラン数だった。そのお蔭で観客動員に大きな功績を遺し、ニューヨーク球場が建てられた。Ruth が、禁酒法が廃案になるころ、選手としては晩年になるのだが、オーナーになぜか嫌われ、契約金がわずか1弗といわれたとき、奥さんがオーナーに向かって「あの球場は、うちの主人が建てたようなものだ」と怒って張り倒した、という話が伝わっている。…… Babe Ruth が野球

の神様と呼ばれるのは、そういう背景があるからである。MLBを世間に知らしめた功績は大きい。まだまだ野球の草莽期である。(高々50年くらい)だから「野球の神様」と呼ばれる。ホームラン60本を超えた選手は何人かいるが、最初のロジャー・マリス以外の選手には、常に薬物投与(筋肉増強剤、ステロイド使用)の疑惑がつきまとっている。

余談になるが、MLB中興の祖と呼べるのは、Jackie Robinsonである。第二次世界大戦後、1900年代では初の黒人選手としてあらゆる罵倒や対戦相手だけではなく、味方の選手からも嫌がらせを受けていたが、それらの嫌がらせに対して決して怒ることなく、フェアプレイに徹した。(どんな嫌がらせかといえば、たとえば子供のいじめを思えばいい。陰湿な攻撃である。さらには、例えば二塁に盗塁するとき、滑り込むRobinsonの顔辺りにタッチすれば、反則とは見做されない。そういうことをすべて承知の上で、それでも怒らない。)チームのオーナーが言う、「やり返さない勇気を持つ」。ロビンソンの活躍で世間の見る目が変わって、そのため、続々と黒人選手がMLBに入団するようになった。そして名実ともに世界最高峰に君臨することになった。

それまでは、黒人は、「人類」として認められていなかったのである。で、黒人は黒人だけで「黒人リーグ」を結成し、不世出の投手Satchel Paigeや、打者ではJoshua Gibsonが傑出していたが、ジョシュは、「黒いルース」と呼ばれ、Ruthは「白いジョシュ」と呼ばれたが、飛距離や打率など、いずれもRuthが得をしている、と言われた。黒人リーグでの記録があまり正確には残っていないためもあるが、ジョシュは生涯で972本のホームランを打っている。だから、すでに述べたように、王選手が世界一というのは日本人だけで、大リーグと単に数字を比較しただけのことで、Ruthは世界一などとは言わず、「大リーグ記録」として名を刻まれている。日本人ごときがホームラン数をどうこうしているなどとは、大リーグでは、なんとも思っていない。

黒人リーグのレベルが低かったと思っているだろうが、オープン戦をすれば、大体6-4の割合で黒人リーグが勝ち越している。いまや、黒人選手がいないと大リーグは成り立たない。随分前の話だが、初の黒人監督が誕生した時、ある主力選手の年俸を決めるとき、その白人選手が、「いくらでもいい。監督の年俸に1弗たしてくれ!」と言い放った。この男は、大リーグや野球の歴史を知らない、ただの馬鹿者なのだが。Satchel Paigeが投球練習をしていたとき、たまたまRuthがベンチで見学していたのだが、徐々に顔面蒼白になっていった、と伝えられている。「火の玉投手ボブ・フェラー(最高速度158km、一説に100マイル以上)が、ペイジの投げる球をみれば、ぼくの速球はチェンジ・アップみたいなものだ」と語ったことはすでに述べた。(NHKは、ペイジの投球を時速153kmと放映していたが、たった1球でなにがわかる!ましてや、40歳をはるかに超えた

ときのことである。NHKの捏造は、この世界にも及んでいる。）

そういう紆余曲折が複雑に入り乱れて、現在のMLBが構成されている。

それはそうとして、大谷の心配りは、当然ながら裏方さんにも行き届いている。ホームランダービーの賞金150万ドルを約30人にすべて投げ出して慰労する。1人50万円になる。これは裏方さんたちには思いがけないボーナスである。そういうことを自然体で行える。

大谷の最大の功績は、慢性的に不振で観客減に陥っていた大リーグに、さらに追い打ちをかけるような新型コロナ感染に対して、SHO-TIMEとして観客を球場に呼び戻した最大の功労者であり、大リーガーを目指す少年や後輩たちに「二刀流の可能性」を遺したことである。大谷ほどの活躍ができるかどうかによるのだが、夢を与えたことが必ずやいつか実のなる日が来るだろう。ときには、現在一流の大リーガーにも影響が及ぶ。200勝を上げているザック・グリーンキー投手がそうである。この気難しい男が、大谷に声をかけた、というだけで周囲が驚いた。大谷を褒めたのであるが、自分がやりたくてもさせてもらえなかったことが気難しさの一因になっていたらしい。それを大谷が実現してくれたので喜んだのだ。

ところで、年俸の話になるが、(選手の評価は、年俸しかない。役者がギャラにこだわることと同じである。)一説に6000万ドルという話が聞こえてきた。現在の為替レートで68億円になる。現在最高の年俸はトラウトの40億円ちょっとである。これに、投手として最高の報酬27億円をもらっている選手がいるが、加えると、単純計算でこのくらいになる。まあ、他人のカネを心配することはない。

もっとお節介なのがついて、週刊誌で大谷の嫁にはだれがいいか、などと、大宅映子さんでさえ、真剣に考えている。曰く、「女子アナはダメ。手練手管で近づいてくるのがいるから注意せよ」云々。大谷の好みも訊かず、勝手に心配している。それこそ余計なお世話であるが、日本人全体の関心事でもある。心配はいらない。スポーツ関連の女子アナは、チャラチャラしたブスばかりだから、あの大谷を育てたご両親がついているのだから、われわれが心配することはない。くやしかったら、優雅な挙措動作で、スッピンで出演してみろ。

大谷の逸話や業績、人格を考えると、これほど楽しいひと時は久々である。この文章を書いていて楽しくてならなかった。・・・生きていてよかった、同じ時代を過ごせているということもある。

この文章を書いている、ふと気づいたのだが、こんな人格の青年がいるということに感動している。ひょっとすると、われわれの想像をはるかに超える、異次元の「聖人」「聖者」かも知れない、とまで思うようになった。ただ、大谷自身は気がついていないだけで、実は途轍もない高潔な人格の持ち主なのかもしれない。大谷としては、単に「野球がうまくなりた、野球が大好きなだけ」かもしれないし、高校 1 年生からずっと、たとえばゴミを拾うことを実践してきただけだ、と言うかもしれないが、この 10 年あまり、どれほどの継続する力が必要なかわかっていないのかも知れない。「人徳」といえばそれまでだが、挨拶ひとつまともにできないのが社会人になったり、選挙権をもったり、大学生でござい、などと名乗る時代である。救世主と名乗る連中は山ほど出た。しかし、大本教の出口王仁三郎師を除けば、すべて偽物だった。野球界のみならず、本物の救世主なのかも知れない。

2021.12.15.